

2022年6月15日

超然の想ひ

地球協同社会へ

www.jomaca.join-us.jp/chikyu.pdf

縄文
JOMONあかでみい
まなぶ
山田 学 ©

※諸民族調和のためにこそ、日本民族の原点を、みつめる。
そのため、旧かなづかひを、させていただきました。

今

地球協同社会へ。

その試みは、可能。なのではないか？

人民と、地球社会の、調和。

人民の、生体と情感と情念と思考。

それが、生産と認識表現と規範にて、協同する。

さういふ、地球協同社会へ。

その試みは、可能。なのではないか？

国民国家の限界。数理哲学と物理哲学の限界。資本制生産の限界。

今、これらの限界を理解し、規範と認識表現と生産を、修正する。

調和へ

議会制民主主義の、国民国家も含め、国家は本来、諸部族の闘争、諸民族の闘争を、調整するための組織です。次に、資産階級の闘争を、調整するための組織です。つまりは、闘争の存在が、前提となつてゐる、組織です。

〈脱国家〉といふ、認識転換こそが、地球協同社会への、入門です。

闘争から、調和へ。

諸民族調和と、資産循環。民間からの、これらへの、規範が、地球協同社会への規範です。民間からの、〈もうひとつの公共〉です。

そして、この数千年の、諸国家といふ規範から、無理なく、無駄なく、^{げだつ}解脱してまゐります。

〈眞智〉

人間社会の認識表現発達は、呪術→宗教→〈哲学ないし諸科学と芸術〉、です。地球協同社会へ、健康平和な、現実の認識が、望まれます。健康平和な、現実の認識を、〈眞智〉と呼ばせていただきます。

17世紀以降、数学と物理学が、発達した。まだ、〈眞智〉の数学、〈眞智〉の物理学と、架空の認識としての、数学や物理学が、混在してゐるのです。むしろ、架空の認識から、数学や物理学を、統制してゐるのが、20世紀以降の、数理哲学と物理哲学、なのです。代表学者は、ラッセル、ヒルベルト、アインシュタインです。地球協同社会へ、異星人やUFOの問題にも、対応する必要があります。これら代表学者を、批判・克服せぬ限り、必要な対応は、不可能です。実は、地球人は、宇宙にて、後進生物にすぎませぬ。異星人に、教へてもらつた、などの、未来的な、エネルギー技術などが、すでに、米軍の裏などに、ある。さういふ説も、あります。

〈聖愛〉

今日、資産階級格差の問題は、だれの眼にも、明らかです。この問題は、〈信用寄付〉によつてのみ、解決します。ただの寄付では、不可です。〈信用寄付〉とは、地球協同社会へ、次のみに、活用されることが、保証されてゐる、寄付です。健康長寿を生産しあふ、流通。野性の復興。諸民族の調和。これらです。

資本制生産から、資産循環へ。〈信用寄付〉による、〈寄付込資本〉へ。地球協同社会へ、NPOなどを、発達させたいものです。

国家単位にて、資産移転する、ケインズ政策にも、限界があります。それは、国内にて既存の、供給体制にとり、有効な需要を、創出するため、財政と金融を調整する、政策です。

地球協同社会へ、人民おたがひの、健康平和な生活の道、といふ視点が、無い。ただの需要でなく、健康平和な需要、といふ視点が、無い。健康平和な、生活協力を、〈聖愛〉と呼ばせていただきます。

希少者の、資産増殖といふ目的、それに合せ、成立してゐる、地球の供給体制の、今。大逆転しよう。〈聖愛〉のため、有効な供給を、開発、拡大させ、無効な供給を、縮小させる。〈信用寄付〉も加へ、やがては、全員の、資産循環といふ目的へ、再編してゆきあふ。〈聖愛〉のため、地球の供給体制の、本格再編。供給体制を維持する、「有効な需要」とは、正反対なのです。

誇り

米国内に、むしろ、西欧人の所得が低下した、州もあり、共和党から、いはば西欧民族主義（トランプ前大統領など）も、出現しました。主に民主党政権下、軍事産業を維持する、「有効な需要」のため、米国による地球統治の、その必要を越えた、軍事行動も、あつた。これは、民族伝統からして、国民国家思想の浸透が、無理な民族にまで、「自由と民主主義を輸出する」、面があつた。

規範と生産に関する、国民国家思想とケインズ政策の、限界を理解し、地球協

同社会への、規範と生産を、高めてまゐりませう。

むしろ、日本社会の民間から、地球規模の、諸民族調和と、資産循環への、起点となる。これが、純情な日本民族の、新時代の誇りです。

旧ソ連と異質

資本制生産を超える、と言ふと、旧ソ連の「社会主義」を、回顧する向きも、あるでせう。あれは、何だつたのか？

レーニンらの、政治革命対象は、ロシア帝国といふ、アジア的帝国、後進的帝国にすぎなかつた。政治革命に成功し、ボリシェヴィキ政権となつても、実は、アジア的帝国のままであつた。統治を支援する思想が、ロシア正教から、マルクス・レーニン主義に、変更されたのみであつた。

レーニンは、ロシア帝国内における、資本制生産の発達について、研究しはした。しかしその発達は、充分ではなく、ましてや、商業の自由や、表現の自由などは、さらに、発達が充分ではなかつた。結果、先進国内のやうな、自由社会を、まともに知らぬまま、マルクス・レーニン主義による専制へ、移行したのみであつた。人民おたがひの、健康平和な生活の道を、専制国家権力が、指導できるものではない。ソ連邦といふ、歴史的な社会実験の失敗から、得られた、苦い苦い教訓です。

さて、わたしどもも、マルクス、エンゲルスに、ひろく深く、学んでまゐりました。が、旧ソ連などとは、まったく異質の、思索をしてをります。

*

社会には三面があります。

①社会の生産の面。生産としての社会＝生産社会です。

②社会の認識表現の面。認識表現としての社会＝認識表現社会です。

③社会の規範の面。規範としての社会＝規範社会です。

①は、社会において人民おたがひが自然およびおたがひの生活を対象とし生産しあふ（労働により対象を調整しあふ）面です。

②は、社会において人民おたがひが世界を認識し表現しあふ面です。

③は、社会において人民が規範（主体的な意志の客観的な調整）により組織される面です。

人間社会の発達（伝統と創造）には生産発達と認識表現発達と規範発達とがあります。

①人間社会の生産発達のうち、剰余労働量集積に着目したのが、ドイツのカール・マルクス師（1818～1883）による資本論です。

②人間社会の認識表現発達のうち、認識と表現の本質に着目したのが、日本の三浦つとむ師（1911～1989）による認識表現論です。

③人間社会の規範発達のうち、諸民族闘争調整と資産階級闘争調整に着目したのが、日本の滝村隆一師 (1944～2016) による国家論です。

以上を承け、日本の山田 学 (1956～) による試みです。

①生産発達として、人民がおたがひの健康平和な生活を生産しあふ可能性を、探る。

②認識表現発達として、諸言語とICT記号の未来を、展望する。

③規範発達として、諸民族調和と資産循環への規範を、追求する。

〈先導修正〉

マルクスは、小共同体ないし協同組合といふ、小規模組織についての、表象から、そのあり方にて、地球規模の組織も、可能なのではないかと、夢想してゐた段階にすぎない。その夢想を具体化する、〈眞智〉の組織論は、後世に託されたのである。まさにこれが、われわれの課題なのです。

時代の制約もあり、マルクスに、不足してゐたのは、からだところの健康とは、なにか、こころと社会の平和とは、なにか、です。この点を、わたしどもは、日本のヨガの沖 正弘師 (1919～1985) から、学びました。諸宗教の源^{みなもと}たるヨガの、未来への復興です。(かの、オウム真理教事件は、法律違反は、当然のこと、ヨガの信用を傷つけた、重罪として、拒絶いたします。)

＊

ありうる地球公会は、学問指導部、生産指導部、道徳指導部、民衆指導部の、分業と協業により、指導されます。

これはそれぞれ、国民国家における、立法、執行、司法、選挙・世論の、分業と協業を、止揚^{しやう} (内容は保存し、形式は否定) してゆくものです。

ありうる地球公会へ、国民国家ないし諸国家を、止揚してゆく、政治解消指導部も、必要です。

指導者が、思索と情念にて先導する。民衆が、それを修正する。かういふ、〈先導修正〉が、専制国家と国民国家の対立を、止揚してゆきます。

人民に、生体と情感と情念と思考が、ある。

これはそれぞれ、会陰^{ゐいん}あたり、小腸腑あたり、心臓あたり、脳下垂体あたりの、働きです。

ヨガのチャクラ名にて、それぞれ、ムーラダーラ、マニプラ、アナハタ、アジナです。

この全心身性に、ありうる地球公会への、各指導部が、先導します。

学問指導部が、思考統合へ、思索先導する。(学問協力) 生産指導部が、生体協力へ、思索先導する。(生産企画) 道徳指導部が、情感安定へ、思索先導する。(道徳推進) 民衆指導部が、情念融和へ、情念先導する。(民衆仲介) 政治解消指導部

が、情念融和へ、思索先導する。(政治解消指令)

地球の各域に、公的協会として、学問協会、生産協会、道徳協会、政治解消協会を、展開する。これら公的協会の運営部は、それぞれ、学問指導部、生産指導部、道徳指導部、政治解消指導部による、思索先導に、民衆指導部による、情念先導を、調和させる。思索先導に、民衆の情念からの、質問・意見・修正案を、調和させる。情念先導そのものに、民衆の反発を、調和させる。かうして、各域の四種公的協会の運営部が、〈先導修正〉する。

人民の、思考と生体と情感と情念。

それが、認識表現 (学問協会)、生産 (生産協会)、規範 (道徳協会ないし政治解消協会) にて、協同する。

人民と、地球社会が、調和する、地球協同社会へ。

学問指導 (学問協力) から、学問発達体へ。生産指導 (生産企画) から、生産調和体へ。道徳指導 (道徳推進) から、道徳共同体へ。民衆指導 (民衆仲介) から、民衆通信へ。政治解消指導 (政治解消指令) から、政治解消世論へ。

ありうる地球公会へ、情念の民衆通信を組織し、思索の学問発達体・生産調和体・道徳共同体・政治解消世論を組織する。

これが、マルクスの宿題に対する、わたしどもの解答です。

なほ、ありうる地球公会への、〈先導修正〉の、事前の萌芽として、わたしどもは、アメリカの商業経営のサム・ウォルトンから、学びました。チェーンストアの雄たる、ウォルマートは、顧客の時流に適合しつづけるべく、顧客にその時点にて有益な安さへの感動を、提供しつづけるべく、会社指導部による先導を、現場の従業員 (アソシエート=事業仲間と呼ぶ) が、修正する。現場感性を、尊重し、商業恐慌を、未然に防ぐ、未来型組織でもある。

地球協同社会へ。

わたしどもの理論は、日本民族の伝統から、創造した、のみではありません。他民族からの輸入も、あります。

学問は、ドイツのヘーゲル、マルクス、エンゲルスから、三浦つとむ師、滝村隆一師を介し、輸入したところがあります。

生産は、アメリカのサム・ウォルトンなどから、渥美俊一師 (1926~2010) を介し、輸入したところがあります。

道徳は、インドのシャカ、ガンジーから、沖 正弘師を介し、輸入したところがあります。

休養と労働

ありうる地球公会へ、公会指導部と、公的協会運営部のもと、私的協会を、自由に、設けます。

近年の、通信の発達により、社会が個人に、解体される傾向に、あります。

あらためて、生産を、再編してゆきたい。

生活は、労働と休養の、くりかへしです。

社会は、労働力と、商品と、貨幣を、仲立ちとし、おたがひの生活こそを、生産しあつてゐます。生活の生産、といふ本質に、帰りたい。そして、もちろん、おたがひの、健康平和な生活の道、これをこそ、生産しあひたい。

生産の再編、社会の再編、です。

生活の、休養面と、労働面から、家庭、同好会、職場を、あらためて、私的協会、といたしませう。

家庭を、恋愛と出産と保育と教育といふ、特殊な労働、それと、生活の休養面、これらのための、協会とする。

同好会といふ、休養協会を、考へる。職場は、生産性のため、分業労働、分業認識が、避けられない。生体と認識に、偏りが生じ、生理を混乱させる。職場の分業労働、これを修正する、保健的な労働、また、職場の分業認識、これを修正する、保健的な認識、これらのための、休養協会を、同好会として、考へる。

職場を、生活の労働面のための、協会とする。地球人おたがひの、健康平和な生活の道、これをこそ、目的とする、生産調和体。それへ向け、自由に創造してゆく。

家庭、同好会、職場の、毎日。地球の諸域の、毎日。健康平和な生活の道を、求めあひ、健康平和な需要、そして、健康平和な商ひを、発見しつづける。生産は、それが、身近でも、商品などはさむ、地球連鎖でも、〈聖愛〉(健康平和な、生活協力)、これをこそ、めざす。

超近代

諸民族調和への道。むろん、簡単ではない。地球史にて、諸民族の盛衰は、必然であつた。認識の理の必然、生理の必然、物理の必然として。〈眞智〉の、民族学ないし民族地理学も、必須です。諸民族間には、感情の伝統もあるが、諸民族性の、それぞれには、存在理由があつた。さう、尊重しあへるところから、少しづつ、冷静な相互理解を、開拓してゆく。

地球の各域に、どの民族が、棲んできたか。とくに、前近代にて、地球の各域の、気候ないし生態系の分布に、食糧生産などの必然も介し、諸民族の分布が、わりと、対応してゐるのではないか。さらに、生活圏の分離もあり、気候ないし生態系の分布に、たとへば、儒教、ヒンドゥー教、チベット仏教、イスラーム教、ギリシア正教、カトリック、プロテスタントといった、大宗教の分布まで、わりと、対応してゐるのではないか。かういふことを、わたしどもは、日本の民族地理学の川喜田二郎師(1920~2009)に、学びました。地球の各域、といふ視点か

ら、他民族の存在理由も、理解しやすくなり、自民族中心主義に、とらはれなくても済む、のではないか。

諸民族の盛衰は、物理・生理・認識の理といふ三面から、また、生産発達・認識表現発達・規範発達といふ三面から、総合理解する必要があります。20万年前からのさまざまな自然環境において、どういふ遺伝模様の人間が、どのあたりに分布し、生活様式ないし生産様式を、どう発達させてきたか。それにとまひ、言語・呪術・宗教・哲学・芸術などを、どう発達させてきたか。諸国家攻防により、諸民族盛衰が、どう調整されてきたか。以上にとまひ、家系意識・部族意識・民族意識も、どう発達したか。

西欧民族から生成した、近代化は、資本制生産の発達、諸技術の発達、数学ないし諸科学の発達、議会制民主主義の発達などにより、また、建築と運輸と金融と通信の発達により、諸民族交流を、促進してゐます。であるからこそ、諸民族性の、冷静な相互理解が、必須です。とともに、西欧民族自身の特殊性、諸民族や諸国家のあひだを、経済的に渡り歩いてきた、ユダヤ民族自身の特殊性なども、自覚していただきたいところです。

地球協同社会創出理論なる、超然理論は、近代化（資本制生産、数理哲学と物理哲学、国民国家）の限界を理解し、資産循環、〈眞智〉、諸民族調和を、志向します。〈脱国家〉の、次の社会を、志向します。日本民族から生成する、超近代、でございます。すでに、国民国家も、その連合も、地球規模の生産関係に、対応できなくなりつつあります。なほ、人民の自由を抑圧しつつ、特定国家が、すべての他国家を軍事制覇しようとした、ナチズムなど。当然のこと、その試みの再現も、拒絶いたします。

〈縄文るねっさんす〉

諸民族調和へ、日本民族が起点となる、理由があります。主に、日本列島の、特異な自然環境が、原因ですが、日本民族の原点に、国家発生以前、一万年以上の、平和な縄文時代があります。部族国家発生後、この数千年間の地球、すなはち、諸民族闘争などの、特異な時代を、相対化しうる、平和性の原点が、日本民族には、あるのです。日本民族の伝統を、反省し、諸民族の調和へ、仲介のあり方も、創造する。まづ、日本民族の野性の復興、これの表明として、〈縄文るねっさんす〉を、提唱いたします。

日本民族は縄文時代や弥生時代の先人の素朴かつ深い体内感覚に学び、森林や水流（泉・川・河・沼・水田・池・湖・海岸・内海・外海）の保全を復興させたいものです。野性の復興です。土地を浄むるといふ意味において、親鸞らとはまた別の意味において、お浄土じやうどと呼びませうか。かういふお浄土感こそ、日本民族の特質（他と比べた特殊な本質）でありませう。縄文時代（1万6千5百年前～2千3

百年前) は、地球一般が石器時代において、縄文土器は実は最先端の文化でした。日本列島は土器が作りやすい自然環境であつたからです。永い縄文時代のものづくり伝統を踏へ、弥生時代(2千3百年前~1千8百年前)には、中国大陸や朝鮮半島から輸入した水田稲作を、平地の少い日本列島向きに改善し定着させました。1万4千年前に揚子江の南部にて始つた原始の稲作にとり、実は日本列島は不向きな自然環境でした。かなり遅れて、そして改善文化の発達も、必要でした。日本民族の特質たる、茶道・華道・書道・芸道・ものづくり道・武道なども、縄文・弥生時代に原点があります。

日本民族のご皇統について、伝説と実録が、あります。伝説の背景にありさうな、縄文・弥生時代などにおける、ご皇統についての〈眞智〉も、追究させていただきたいと、存じます。西欧民族の実証精神からも、尊重されるためです。その上にて、新時代の日本民族愛も、育てさせていただく。ご皇統は、次の社会へ、〈脱国家〉にて、〈諸民族調和道〉といふ、家元となられては、いかがでございませうか。かの、大日本帝国の敗戦に対する、(形式上の)ご責任の意味あひも、含めまして。(日本国にて8月15日は、大日本帝国の敗戦の日ですが、〈終戦=あらゆる国家間の戦争の終り〉を、祈りたい日でもあります。)

日本国は、今の統治領域を、拡張する必要は、ほぼ、ありません。

今の統治領域を、他国から、侵害されぬため、統治(外交・通商貿易・金融政策・軍事・治安警察)の〈眞智〉を、確立・保持し、実行する。(立法・執行・司法)

純情な日本社会発の、超近代、地球協同運動(地球協同主義)を、保護し、推進するためです。

情念融和

民族地理学の川喜田二郎師は、KJ法(川喜田^K二郎^J法)なる、研究事務の技法も、創始しました。現場の渾沌のままに、取材を進め、そのばらばらな情報を、ひとつひとつの情念のままに、無理なく無駄なく、融和させてゆき、自身の思ひ込みから解脱しつつ、〈眞智〉の秩序を発想する。伝統から創造への、技法でもある。(世間には、むしろ虚像が流布してゐるから、注意。)ありうる地球公会へ、公的協会運営部の、〈先導修正〉にて、使用できる。民衆指導部による、情念先導(民衆仲介)の、技法として。^{ぜろいち}01 論理のICT(情報通信技術)を、補ふ、情念融和の技法として、ありうる地球公会へ、情念の民衆通信を組織します。とくに、政治解消協会にては、政治解消指導部による、これも情念融和への、思索先導(政治解消指令)と、協同します。なほ、政治解消は、統治(外交・通商貿易・金融政策・軍事・治安警察)を最後とし、それ以外の行政を、ありうる地球公会へ、公的協会運営部や、さらに私的協会へ、無理なく無駄なく、移行させます。

本稿の理論も、研究事務としては、46年間、KJ法を積み重ねた、創造です。

区別と連関

ICTは、本来の可能性を、まだ、まったく実現してゐないのではないか。01記号による、記録と通信の技術は、発達しつつある。地球協同社会へ、あらゆる学問成果を、論理整理し、記録し公開し、わかりやすく、内容検索ないし形式検索できるやうにする。これこそ、ICTの本来の可能性ではないのか。要は、人間側の、学問努力が不足してゐます。

学問史にて、キリスト教の新教ルター派に関係する、観念論の立場から、全学問をまとめようとしたのが、ドイツのヘーゲル (1770~1831) です。それに対し、「唯物論」の立場から、すべてをやり直すと、決意した弟子が、マルクスとエンゲルスです。が、両者の学問の内実は、ヘーゲルの弟子として、精神の重要さも、当然のこととされてゐる。反ヘーゲルのため用ゐた「唯物論」といふ表現は、資本制社会末期の現在、誤解されやすくもあるから、〈現実論〉と言ひかへます。

〈眞智〉(健康平和な、現実の認識)の立場から、あらゆる学問成果を、論理整理することは、マルクス、エンゲルスの生前には、とても実現できず、実は、実は、「社会主義圏」とも無関係に、20世紀以降日本の、しかも在野の学者に、継承されたのです。先述の三浦つとむ師を起点とし、師から影響を受けた人びと(山田 学を含む)に、継承されたのです。

世界を、一面からのみ、観てはいけません。世界には、いくつもの面があり、〈諸面の区別と連関〉を解明していく、このことこそが、本質論なのです。

ドイツのヘーゲルにとり、このことは、常識でした。これを否定してしまひ、「現代哲学」を、出発させてしまつた。その人が、イギリスのラッセル (1872~1970) です。ラッセルは、数学者出身。世界を一面からのみ、観て、「無矛盾」を、夢想しました。あるいは、大英帝国の地球支配、それにとり、ラッセル思想も、必要だつたのでせう。

実は、今のICTも、論理としては、ラッセルの弟子です。結果、さまざまな矛盾に、ぶつかつてゐます。

わたしには、9名の日本人師匠が、あります。(一部は先述、一部は後述。)わたしの半生の、時代性でもあります。左翼系(三浦つとむ、滝村隆一、吉本隆明など)と、右翼系(沖 正弘、川喜田二郎など)の、交流が特徴です。

わたしは、今の学界やマスメディアにおいては、ばらばらに、扱はれるしかない、9名師匠の、区別と連関につき、何年も、何十年もかけて、解明してまゐりました。統合することが、できました。ここに、わたしの独創性も、あると、考へます。すなはち、日本民衆の底力について、まづは、思索と情念の水準にて、まとめあげた、といふわけなのです。これは、ヘーゲルに学んだ、本質論を、地球

の未来のためにこそ、実行してをる、といふことであります。

ラッセルでない、ヘーゲルに学んだ、わたしの視座からこそ、創造のための、熟議と、それを促進する、新たなICTが、ほしいです。未来の社会組織のあり方を、考へても、今までのSNSなどとはまた別の、ICT開発こそが、必要です。(非難しあふのでなく、調和追求協同思索法、の開発です。) これはまた、話題のAIやロボットなどとも、別の道です。

民衆通信の基礎について、書きます。

言語や貨幣の形式、それにとらはれ、その内容、すなはち、意味や価値といふ社会関係、これを、正しく理解しない。つまり、地球人がおたがひの、認識と労働、これを、正しく理解しあつてゐない。さういふ現状を、反省する。意味とは何か。これを、ひろく深く理解した言語へ。価値とは何か。これを、ひろく深く理解した貨幣へ。さう、変革していく。

世界学

地球のこの数千年間は、特異な時代、諸民族闘争と資産階級闘争の、時代でした。そして、どの国家に限らず、指導者や運営者と、民衆が、実は、〈邪智〉(病的戦争な、架空の認識を、かう、呼ばせていただきます。)にて、とりつくろひあふ関係、なのでした。今も、「科学と民主主義の時代」であるからこそ、かへつて、虚偽情報を、意図的に流通させる、情報戦が、蔓延してゐます。このあたりの実情を、わたしどもは、高橋五郎師(1940~2017)を中心に、学んでをります。

ありうる地球公会へ、日本社会の民間から、縄文人の、まだ戦争も知らない、純情さを、復興したい。ありうる地球公会へ、〈邪智〉から解脱し、公会指導部にても、公的協会運営部にても、私的協会にても、個人にても、〈眞智〉(健康平和な、現実の認識)を、追究しあひたい。さうでない限り、指導者や運営者と、民衆が、調和しないからです。ありうる地球公会へ、人間は、〈眞智〉の前に、平等です。

世界は、あるいは、世界の諸分野は、現象と構造と本質の統一、です。人民ひとりひとりには、それぞれ、さまざまな生活や生産、から、現象の認識や、構造の認識や、本質の認識が、あります。それらを、〈眞智〉(健康平和な、現実の認識)、まさにこの立場から、自覚的に、組織していきあふ。つまりは、〈眞智〉の世界学を、発達させあふ。ありうる地球公会への、学問発達体です。

民衆は、比較として、現象の認識が、強い。運営者や指導者は、比較として、構造の認識や、本質の認識が、強い。さういふ、役割分担としての、社会組織論です。

世界の現実を反映してゐる認識、それが、現実の認識です。世界の現実を反映してゐない認識、それが、架空の認識です。ただし、人間の健康平和にとり、そ

れが架空の認識であると、自覚した、架空の認識は、有益であることも、あります。それは、睡眠中の夢や、覚醒中の芸術内容などにて、あります。

冥想生活

ある意味、近代化への抵抗として、旧ソ連とか、ファシズムとか、一部新興宗教とか、悪い例もありましたが、未来へ、個人が、集団に、埋没してはなりません。自身の体内への注意が、からだところろの健康、ところろと社会の平和の、基礎です。これこそ、数千年前のヨガに学ぶ、超近代であり、ありうる地球公会への、〈自立協同〉です。近代の、議会制民主主義は、地主貴族の利害へ、資本家の利害が、また労働者の利害が、主張した過程にすぎません。全人民おたがひの、健康平和、といふ想ひが、まだ発達してゐないのです。未来への安心の、本質を追求し、次の社会へ、大欲をもつことが、超近代です。今の日本マスメディアは、その可能性を、知りません。近代的議論（契約国家論）が行き詰りの、国連体制も、それを、知りません。

人間には、自然治癒力が、ある。

なにもせず、それが働くことは、ない。

体内に、注意する。快か、不快か。体内が、調和してゐるか、ゐないか。生命の理、生理にしたがふ、悦び。

この悦びを、意識して、四六時中、瞬間瞬間にて、求めつづける。からだところろの健康、ところろと社会の平和、健康平和な生活の道を、求めつづける。

生理にしたがふ、悦びの道を、四六時中、瞬間瞬間にて、求めつづける、意識。求道の、意識。これこそが、自然治癒力を、全開してゆく。

求道の、意識により、冥想しつつ、生活する。

今の、通信大企業たちも、まだ、過渡期のうちにあり、その、最終なのです。次の社会への、意識転換が、要る。アルゴリズム（機械手順）は、問題を解決できぬ。問題を解決するのは、ひとりひとりの、冥想生活。生理にしたがふ、悦びへの連帯。そのための、もうひとつの通信です。

生活には、六面が、ある。

姿勢動作。呼吸。食事と排泄。人間関係、とくに異性関係。精神。生活環境。

生活には、苦しみ悩みが、ある。生理にしたがふ、悦びの道としては、苦しみ悩みこそが、導きの糸。快か、不快か。体内が、調和してゐるか、ゐないか。快を、求める。体内の調和を、求める。無を、求める。不快が無いを、求める。体内の不調和が無いを、求める。

姿勢動作は、これでよいか？ 呼吸は、これでよいか？ 食事と排泄は、これでよいか？ 人間関係、とくに異性関係は、これでよいか？ 精神は、これでよいか？ 生活環境は、これでよいか？

基本、自身の、四六時中、瞬間瞬間の、冥想にて、生活修正の道を、発見しつづける。この数千年間の、迷ひの時代の、中途半端な、規範、学問、祈り、慣習に、とらはれるな、はからふな。解脱せよ。

自身の、受精ないし生誕から、死まで、自身の体内も、社会環境も、自然環境も、変化しつづける。変化に対応し、生理にしたがふ、悦びの道として、生活を、不断に、修正しつづける。不断修正人生こそが、自然治癒力を、全開してゆく。

個性別の、苦しみ悩みこそを、導きの糸として、必ず感謝し、生活修正の道を、発見しつつ、個性別に、楽しみ悟りに、接近する。これのくりかへしが、人生である。

ひとりひとりの冥想生活、不断修正人生を、伝へあふ。健康平和な生活の道とは、どういふものか？ 悦びへの伝言を、寄せあひ、今からこそ、まともな、規範、学問、祈り、芸術、養生を、創出してゆきあふ。生理にしたがふ、悦びの道としての、統一人間社会は、今こそが、やうやく、出立^{しゅったつ}点なのです。基本、この数千年間を、否定せよ。

生理にしたがふ、悦びの道には、確認の要点が、ある。呼吸は、楽か？ 脈は、ととのつてゐるか？ 気分は、よいか？ 安眠も、工夫します。

体内に、注意し、生理にしたがふ、悦びの道を、〈生理化〉と、呼びませう。

病的戦争な、現代社会を、自然に、治癒させあひませう。

ひとりひとりの〈生理化〉による、生活修正こそが、保健、求道、修業こそが、すなはち、個性別の、道徳です。ありうる地球公会へ、道徳共同体です。道徳といふ生活規範は、個々人に、属します。道徳協会の運営にて、可能なのは、道徳そのものでありません。道徳案、道徳の提案のみです。道徳は、他から、おしつけられるものでありません。

ありうる地球公会へ、道徳協会運営は、（道徳指導部による）体内注意の推進に、（民衆指導部による）ほんね表明の仲介を、調和させます。なほ、ヨガの沖正弘師は、戦中、陸軍特務にて、マハトマ・ガンジー師のおそばにて生活し、「シャカなどは、ヨガにて、悟つたんだよ。」と、ガンジー師から、教へられました。

地道な事業

とくに日本の、少子高齢化への根本対策は、〈養生〉＝〈恋愛・出産・保育・教育・保健・看護・医療〉の、最高品質最低費用を、追求しあふことです。かの、バブル崩壊以降、日本の政界・官界・財界・報道界・学界による、認識と行動は、時流に適合してゐるでせうか。彼らが学んだ教科書に、書いてゐない状況もあり、あるいは、迷走し、あるいは、個別生活温存（自己保身）に、とらはれてゐないでせうか。

さしあたり、彼らに怒り、つまりは、なにかを期待しても、し方がなく、今の

日本の若い世代は、ともかく、できるところから、NPOなどにて、助けあひを始めてゐるやうです。

地球において、市場拡張可能性（いはゆる、フロンティア）が、無くなりつつあります。（であるからこそ、世界経済フォーラムなどは、「コロナ・ワクチン」や、「ウクライナ」なども、しかけたやうです。）かつて、鎖国により、市場拡張可能性を、人為的に断ちきつた、わが江戸時代の、日本列島内における、創意工夫のあれこれに、これからの人間社会全体が、学ぶべきものもありませう。

近い将来、米国も、中国も、衰退すると、考へられます。

日本国憲法の、平和理念は、守るべし。しかし実際、内閣法制局による「憲法解釈」などにより、実質、当初の平和理念は、すでに、実在しません。（現行憲法の文言のみを、守つても、かへつて、平和理念が、実現しないのです。）

あらためて、純情な日本社会発の、超近代、地球協同運動（地球協同主義）を、保護し、推進するためにこそ、米国にかなり、頼つてきた、統治（外交・通商貿易・金融政策・軍事・治安警察）を、無理なく無駄なく、自立させてゆく。とくに、情報戦の実力を、最高に、向上させ、無駄な活動や経費を、省く。敗戦直後より、さらに高めた、新たな健康平和理念からこそ、日本国憲法改正は、必要でせう。

ここで、自由について、書くと、近代化の、商業の自由や、表現の自由などは、超近代にても、継承すべし。しかし、資本制社会末期の今は、軍事・治安警察の自由や、資産増殖の自由や、〈邪智〉（病的戦争な、架空の認識）の自由が、度を、超えてゐる。ヘーゲルが、「自由とは、必然性の洞察である。」と、言つた。〈眞智〉に徹すると、人民ひとりひとりは、〈世界対応の自由〉、これを、拡張していきうる。ひとりひとりが、〈眞智〉（健康平和な、現実の認識）の、〈学問と技能と規律と体力〉、これを、自分に増す。さうして、〈世界対応の自由〉、これを、拡張していきたい。

1789年フランス革命の光景や、1917年ロシア革命の光景などを、将来に、追ひかけても、し方がない。人民ひとりひとりの、認識転換と、行動転換を、推進する、民間からの、地道な事業こそが、正解なのです。

今のICTにより、特定の人物や団体に向け、多様かつ大量の発言を集中することは、容易となつた。しかしそれで、その人物や団体は、まともに問題を解決できるでせうか。先述のKJ法に関し、川喜田二郎師は、かういふ見当を、つけてゐる。すなはち、ひとつの問題解決について、意見の多様性は、800件を超えることはない。なら、あらかじめ、なるべく多様な人びとに、腰をすゑて取材し、渾沌とみえた意見群を、KJ法図解にて秩序化する。そのKJ法図解の各部分に対し、まさにICTにより、投票してもらふ。これで、〈眞智〉の世論表明も、可能なのではないか。今は、質問の文言を操作する、いはば世論調査詐欺も、横行してゐるか

ら、検討すべき、KJ法応用です。

さて、わたしは、遺伝模様としては、凡人と、思ひます。なにより、かの、ヒロシマ、ナガサキから、約10年後に、生誕を、いただいた。当時の、社会情況こそが、本稿の理論に、帰結したと、考へます。わたしの年代は、空想を含む、平和思想が、常識でした。本稿は、空想を、〈眞智〉にした、努力です。今から思へば、わたしは、さりげなく、最高の学問環境に、恵まれてゐた。(今の若い世代は、かはいさうに、それが、欠乏してゐるのです。)当然のこと、実の父母による、わたしへの愛情も、あつた。名古屋駅西方の、生誕地にあり、信長大先輩や、秀吉大先輩の、努力に恥ぢぬ、全力奮闘を、お誓ひ申し上げます。

等価交換

資産階級格差の問題は、〈信用寄付〉によつてのみ、解決すると、先述しました。資本制社会にて、剰余労働量の集積は、まさに等価交換によつてこそ、実現してゐる。このことを、論証したのが、マルクスです。(後述) 剰余労働量の集積は、善いとして、それに、〈信用寄付〉を調和させ、資産循環を、実現してゆく。これが、わたしどもからのご提案です。ただし、マルクスにはまだ、集積された剰余労働量を、政治的軍事的に、収奪するといふ、想像もあつたやうです。それにより、そのあと、「労働者の代表が、経済を計画し、管理する。」といふ、想像もあつたでせうか。しかしながら、生産といふものは、指導者が一定の企画をし、民衆が現場から修正する、といふことは、可能であつても、一方的に、管理できるものではありません。旧ソ連失敗の責任の一端は、やはり、マルクス、エンゲルスにも、ありませう。先にご提案した用語にて、表現させていただければ、人民ひとりひとりこそが、〈生理化のため眞智にて聖愛〉しあつてこそ、健康平和な需要と、それへの供給が、無理なく無駄なく、発見できてゆくでせう。諸民族調和への起点としては、〈縄文るねっさんす〉です。

*

生産は、労働により、対象を調整しあふことです。ここで対象は、自然、および、おたがひの生活です。生産は、自然、ひいては、おたがひの生活を、労働により、調整しあふことです。(あらゆる人工物も、元は、自然です。)

あらゆる生産物(元は自然を、調整した物)において、その生産物に至るまでに、さまざまな生産を累積することが、多い。〈生産累積過程〉と、呼びませう。

〈生産累積過程〉のなかに、労働連鎖の構造が、あります。この労働連鎖の構造を、生産物の〈価値〉と、呼ぶことにしませう。人間おたがひの労働に、着目する概念です。その生産物の、使用における〈有益さ〉とは、区別する概念です。そして、生産物の価値量は、その生産物を生産した、過去の労働量です。

生活は、労働と休養の、くりかへしです。休養においては、食・衣・住・娯楽

教養その他の、休養手段がある。休養手段は、生産物や他の人の労働や自然、です。休養や、(人びとの生活に密着する)生活の生産(保育・教育・保健・看護・医療)において、労働力(認識力を含む)が、養はれます。この際の、休養手段の労働量ないし価値量(過去の労働量)と、生活の生産にかかはる、労働量ないし(道具その他労働手段の)価値量(過去の労働量)を、総じ、労働力(認識力を含む)を養ふために、必要な労働量、と呼びます。

人間の労働力は、労働力自身のために、必要な労働量より、多い量の労働が、可能なのです。かうして、多い労働量を実行した場合、実行労働量から、必要労働量を引いた差を、剰余労働量と、呼びます。

商品販売へ向けての、生産にて、労働力といふ商品を、必要労働量相当の価格にて、購入する。労働力を組織した、労働実行を通し、剰余労働量を集積する。これが、資本制生産の本質です。労働力といふ商品の購入は、あくまで、必要労働量相当の価格にてする、公正な等価交換なのです。国民国家の労働法などにて、実質、さう扱はれてゐます。(マルクスが、論証したこと。)議会制民主主義(参政権の平等)において、剰余労働量集積(資産増殖の不平等)が、ある。これが、国民国家の本質であり、それをどう解決するかが、超近代です。

9名師匠

わたしどもは、さしあたり、^{縄文}JOMONあかでみいと称する、任意団体です。超近代の、地球協同社会へ。地球協同運動を、実行する。やがては、ありうる地球公会へ、公会指導部と、公的協会運営部に、分化してまゐります。民間からの、〈まうひとつの公共〉です。マルクスの時代から、ユダヤ民族などが志向してきた、「インターナショナル」とは、異質論理の、いはば東洋流、地球協同運動です。(かつての標語、「大東亜共栄圏」は、東アジア限定の、しかも、軍事でした。新時代は、健康平和冥想による、〈地球共栄〉こそを、めざしませう。)先述の滝村隆一師に学び、国民国家を含む、国家そのものの限界を、自覚した。あくまで、無理なく、無駄なく、政治解消世論も、組織してまゐります。

わたし個人は、得意分野ではありませんが、文学ないし芸術については、三浦つとむ師から影響を受けた、吉本隆明師(1924~2012)の文芸観に、学んでをります。

芸術は、主体を解放することでせうか。世界は体内と体外と認識じたいです。体外を認識し認識を反省し体内の要求のまま生活する。これが、客体に対応して主体を解放すること、でありませうか。

日本人民の教育については、近代日本の、福沢諭吉による脱亜入欧教育の成果も踏へつつ、その一面教育を、克服すべし。庄司和晃師(1929~2015)は、民俗学の柳田國男から、直接のご指導も受けられ、前代教育(江戸以前の教育)を再

評価することの重要性を悟られ、維新以降の学校教育も深く承知しつつ、全面教育学を、創始し、深めてをられます。庄司師には、知る人ぞ知る、名人芸があつた。こちらからなにか、手紙や資料などをお送りすると、間髪を容れず、手書きのお葉書などにて、絶妙の激励のことばなどを、返して下さつた。禅の状態も会得された、教育家であり、30年間にわたり、超近代への、わたしの孤高の志を、支へて下さつた、恩人です。

わたしが、悠久壮大な志をもつに至つた、起点は、実父の山田^{としを}俊郎師 (1926~1996) です。実父が開拓した、〈TQ技術〉は、氣功の工業化であり、アジア診療の結晶点です。これの学問化と、社会化が、すこぶる難題であり、地球協同社会へ、〈縄文るねっさんす〉を、前面に立てるべしと、結論したのです。

西欧近・現代の物理学や生理学もまだ、一面的ではないのか。たとへば縄文人が土器・土偶に表明したと考へられる、生理感覚ないし物理感覚などとの、区別と連関。じっくりじっくりこれを解明していつてこそ、はじめて、全面的な、〈眞智〉の生理学ないし物理学が、今後において、確立するのではないか。今の学問権威とは異質な、かういふ問ひかけを、抑制できぬ。それが、〈TQ技術〉の生産現場です。

わたしの9名の日本人師匠を、ありうる地球公会へ、公会指導部、公的協会運営部に位置づけ、一覧していただきます。(位置づけの判断はすべて、山田 学の責任であり、各師匠は、無関与です。敬称略。)

学問指導・渥美俊一／生産指導・三浦つとむ／道徳指導・沖 正弘／民衆指導・吉本隆明／政治解消指導・滝村隆一。

学問運営・川喜田二郎／生産運営・山田俊郎／道徳運営・庄司和晃／政治解消運営・高橋五郎。

商業経営学の渥美俊一師を、学問指導とし、民族地理学・KJ法の川喜田二郎師を、学問運営とするのは、もちろん、学問全体の意味でなく、地球協同社会へ、入門部の学問、といふ意味です。

9名師匠は、一部を除き、まだ有名でない方ばかりですが、それは、今でなく、未来を相手にして来られたからであると、考へます。

架空の来世、ではない。今、民間のひとりひとりから、地球協同社会へ、できることを、積み重ねてゆく。資本制社会の混乱は、さう、遠くない将来に、ある。建築と運輸と金融と通信と提案を、ひろい意味の〈交通〉と、呼びませう。まさに、資本制社会が、〈交通〉をかなり、発達させた。が、最後に欠落してゐるのが、地球協同社会への、ご提案なのです。それへの、批評と参画なのです。ヒロシマ、ナガサキ、フクシマも経験した、日本社会から、ならではの、未来開拓なのです。本稿を読んで下さつた、みなさま。おひとりおひとりなりに、認識を転換し、行動を転換されませんか。だれか、「偉い人」に、頼つてゐても、状況は悪化する

ばかり、なのです。欧米に先例が無いと、不安となる、日本インテリよりは、各種現場対応に、工夫を発揮しやすい、日本の一般人のほうに、まづ、期待させていただきます。本稿の理論は、前代未聞。が、9名の日本人師匠の、内実を、お知りいただければ、そして、9名師匠を、論理整理できたことを、ご確認いただければ、むしろ、無理なく、無駄なく、歩みを進めた上にての、自然な創造であると、ご納得いただけることとせう。不思議は、ありません。むろん、地球協同社会へ、より善いご意見があれば、積極的に、耳を傾けさせていただきます。

〔文献〕本稿執筆のため、以下の文献を、参考としました。

- 三浦つとむ『弁証法はどういう科学か』(講談社現代新書1968)
三浦つとむ『認識と言語の理論 第一・二・三部』(勁草書房1967～1972)
三浦つとむ『言語学と記号学』(勁草書房1977)
三浦つとむ『こころとことば』(季節社1977/明石書店2006)
三浦つとむ『認識と芸術の理論』(勁草書房1970)
松本克己『世界言語のなかの日本語日本語系統論の新たな地平』(三省堂2007)
ヘーゲル全集『改譯大論理學 上巻の一・上巻の二・中巻・下巻』(武市健人譯・岩波書店1956～1966)
G.W.F.ヘーゲル『哲学史講義 上・中・下巻』(長谷川 宏訳・河出書房新社1992～3)
滝村隆一『国家論大綱 第一巻 上・下』(勁草書房2003)
滝村隆一『国家論大綱 第二巻』(勁草書房2014)
滝村隆一『ニッポン政治の解体学』(時事通信社1996)
北野幸伯『日本の地政学日本が戦勝国になる方法』(育鵬社2020)
マルクス『経済学・哲学草稿』(長谷川 宏訳・光文社古典新訳文庫2010)
マルクス『経済学批判』(武田隆夫・遠藤湘吉・大内 力・加藤俊彦訳/岩波文庫1956)
マルクス『資本論(一)～(九)』(エンゲルス編・向坂逸郎訳/岩波文庫1969～1970)
斎藤幸平『人新世の「資本論」』(集英社新書2020)
沖 正弘『生きている宗教の発見だれでも悟り救われる沖ヨガ修行法』(竹井出版1985)
沖 正弘『ヨガ総合健康法沖ヨガの考え方と修行法(上)』(地産出版1976)
沖 正弘『なぜヨガで病気が治るのかヨガ総合健康法(中)』(地産出版1977)
沖 正弘『沖ヨガ入門精神が肉体を自由にできる』(季節社2019)
川喜田二郎『環境と人間と文明と』(古今書院1999)
川喜田二郎『素朴と文明』(講談社1987/講談社学術文庫1989)
川喜田二郎『野性の復興デカルト的合理主義から全人的創造へ』(祥伝社1995)
山浦晴男『地域再生入門寄りあいワークショップの力』(ちくま新書2015)
安田喜憲『一万年前気候大変動による食糧革命、そして文明誕生へ』(イースト・プレス2014)
斎藤守弘『神々の発見超歴史学ノート』(講談社文庫1997)
寺沢 薫『日本の歴史02王権誕生』(講談社学術文庫2008)
田中英道『新しい日本史観の教科書正しい歴史に「修正」せよ』(ビジネス社2019)
田中英道『美しい「形」の日本文字では表せなかった美の衝撃』(ビジネス社2013)
吉本隆明『詩人・評論家・作家のための言語論』(メタログ1999)
吉本隆明『アフリカの段階について史観の拡張』(試行社1998)

吉本隆明『改訂新版共同幻想論』(角川文庫1982)

庄司和晃『柳田民俗学の子ども観』(明治図書1979)

庄司和晃『全面教育学入門渡世法体得という教育本質観』(明治図書1994)

渥美俊一『21世紀のチェーンストアチェーンストア経営の目的と現状』(実務教育出版2008)

吉田繁治『ザ・プリンシプルサム・ウォルトンが実践した経営の成功原則100』(商業界2009)

吉田繁治『新しいチェーンストア戦略 新装改訂版大閉店時代に勝ち残る唯一の方法』(ビジネス社2021)

吉田繁治『財政破産からAI産業革命へ日本経済、これから10年のビッグ・シフト』(PHP研究所2017)

吉田繁治『臨界点を超える世界経済通貨と金をめぐる4大危機に備えよ』(ビジネス社2019)

吉田繁治『アフターコロナ 次世代の投資戦略財政・金融の危機を資産づくりのチャンスに変える』(ビジネス社2020)

増田悦佐『戦争と平和の経済学世界は今、500年に1度の大転換期だ』(PHP研究所2017)

増田悦佐『日本再興世界が江戸革命を待っている』(ビジネス社2021)

増田悦佐『資産形成も防衛もやはり金だ』(WAC BUNKO2021)

浜 矩子『「共に生きる」ための経済学』(平凡社新書2020)

小阪裕司『「顧客消滅」時代のマーケティングファンから始まる「売れるしくみ」の作り方』(PHPビジネス新書2021)

三浦 展『第四の消費つながりを生み出す社会へ』(朝日新書2012)

清水義次・岡崎正信・泉 英明・馬場正尊『民間主導・行政支援の公民連携の教科書』(日経BP社2019)

駒崎弘樹『社会を変えたい人のためのソーシャルビジネス入門』(PHP新書2016)

原 丈人『「公益」資本主義英米型資本主義の終焉』(文春新書2017)

深田萌絵『ソーシャルメディアと経済戦争』(扶桑社新書2021)

坂村 健『DXとは何か意識改革からニューノーマルへ』(角川新書2021)

西垣 通『新 基礎情報学機械をこえる生命』(NTT出版2021)

原 英史『総務省解体論強すぎる権限が国家の機能不全を起こす』(ビジネス社2021)

高橋五郎『天皇の金塊』(学習研究社2008)

高橋五郎『原爆奇譚今明かされる“究極の原爆の秘密”』(学研パブリッシングMU NONFIX・2015)

落合莞爾『京都皇統の解禁秘史天皇とワンワールド』(成甲書房2015)

落合莞爾『天皇と黄金ファンド古代から現代に続く日本國體の根本』(成甲書房2016)

落合莞爾『天皇皇統になりすましたユダヤ十支族「天皇渡来人説」を全面否定する』(成甲書房2016)

落合莞爾『南北朝こそ日本の機密現皇室は南朝の末裔だ』(成甲書房2013)

月海黄樹『希代の呪術師秀吉の正体』(トクマブックス1995)

菅沼光弘『菅沼レポート・増補版守るべき日本の国益』(青志社2012)

デイビッド・J・ディオニシ『元米陸軍情報将校が解明した真相原爆と秘密結社なぜ聖地ナガサキが標的とされたのか』(平和教育協会訳・成甲書房2015)

古川和男『原発安全革命』(文春新書2011)

矢部 孝・山路達也『マグネシウム文明論石油に代わる新エネルギー資源』(PHP新書2010)

〔関連文書〕 よろしかつたら、以下も、合せ、お読みください。(山田 学筆)

地球大転換に備へる、根源からの祈り。＝〈悦びへの伝言〉

有益さ主張 www.jomaca.join-us.jp/dengon_fine.pdf

本文 www.jomaca.join-us.jp/dengon.pdf

転ばぬ先の杖＝〈TQ、しませんか?〉

有益さ主張 www.jomaca.join-us.jp/tq_fine.pdf

本文 www.jomaca.join-us.jp/tq.pdf

〔山田 ^{まなぶ}学 略歴〕

1956年3月 名古屋駅西方(中村区竹橋町)に生れる。

1974年 名古屋大学教育学部附属高校卒

1975年 東京大学(理科I類)入学

1978年 同工学部計数工学科進学

同漕艇部主務

1981年 同学科退学

学科専攻に関連し、人間とコンピュータの矛盾(意志と必然の矛盾)といふ、根源問題に、挑みたかった。学外の、三浦つとむ師、沖 正弘師、川喜田二郎師に、まともに学びたかった。

以降、在野の学者を志し、生活費は、学習塾教師、小企業経理事務、ソフトウェア開発などにより、得た。

1992年8月 実父から、実父の〈TQ技術〉につき、本格的な説明を受ける。

1996年10月 実父永眠。実父の有限会社代表を継承。

2005年11月 〈TQ技術〉を起点に、あらゆる問題を解決してゆくため、^{縄文}JOMONあかだみ
いサイト www.jomaca.join-us.jp を、開始。